

体育系大学生と医療系専門学生のパラスポーツ、 障害者に対する意識調査

— パラスポーツに関わる人材育成の検討 —

Comparison of the awareness of parasports and people with disabilities between
physical education university students and medical professional students

— Consideration of human resource development related to parasports —

体育学部健康科学科

小玉京士朗

KODAMA, Keijiro

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

体育学部健康科学科

古山 喜一

FURUYAMA, Yoshiichi

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

要旨：本研究は、パラスポーツおよび障害者に対する印象に関するアンケート調査を体育系学生と医療系学生に対して実施し、パラスポーツに関わる人材育成について検討することを目的とした。以下の結果が得られた。1. 両群ともにパラスポーツに対する認知は高いが、経験の割合は低い。2. 両群ともにパラスポーツはリハビリテーションの一環で実施する認識を持ち、医療系学生は有意に大きかった ($p<0.01$)。3. 障害者をサポートする意識は、医療系学生が有意に大きかった ($p<0.01$)。以上のことから、積極的な医療、障害教育、実践活動への参加プログラムを教育課程に導入する必要がある。

Abstract： The purpose of this study was to conduct a questionnaire survey of physical education students and medical students regarding their impressions of parasports and people with disabilities, and to examine the development of human resources involved in parasports. The following results were obtained. 1. Both groups had a high awareness of parasports, but the proportion of those with experience was low. 2. Both groups believed that parasports are part of rehabilitation, which was significantly higher among medical students ($p<0.01$). 3. Medical students had a significantly greater awareness of supporting people with disabilities ($p<0.01$). From the above, it is necessary to introduce active medical care, disability education, and participation programs in practical activities into the educational curriculum.

キーワード： アンケート調査, パラスポーツ支援, 人材育成

Keywords： questionnaire research, parasports support, human resource development

1. はじめに

令和4(2022)年3月にスポーツ庁より第3期スポーツ基本計画が策定され、令和8(2026)年度までに障害者の週1回以上のスポーツ実施率を40%(若年層は50%程度)、障害者の年1回以上のスポーツ実施率を70%(若年層は80%程度)とすることを目指すと目標を掲げている¹⁴⁾。2023年のスポーツ庁における障害児・者のスポーツライフに関する調査では、週に1

日以上運動実施率は20歳以上で32.5%、7-19歳で34.4%と前年度に比べてともにほぼ横ばいであり、また非実施者の「特に運動・スポーツに関心がない」割合が72.0%と前年度の78.1%に比べたら減少しているが、無関心層の割合が多いことが報告されている¹⁴⁾。一方で、国内のパラスポーツ環境について地域差はあるが、障害者が専用・優先的に利用できる施設は増加傾向にあるが、パラスポーツを支えるボランティア組織および指導者等の支援人材が足りていないと報告され

ている¹¹⁾。このことから、東京パラリンピックの開催決定を契機に、国内ではパラスポーツに関わる施設環境を含めた場づくり、いわゆるハード面は整備されつつあるが、障害者が生涯にわたりスポーツを実施するために関わる人材、いわゆるソフト面の整備が求められている。具体的には、コーディネーターの育成、スポーツの機会創出、パラスポーツの促進、教員への研修、ボランティアの育成などが挙げられ¹⁴⁾、人材の育成および確保は、障害者がスポーツを取り組む上で重要な課題とされる。この課題に対し近年、大学、専門学校に期待が寄せられている。その理由の1つとして現在パラスポーツは「支える」だけでなく、「する」ことで多様性の理解を含めた教育的効果が期待されるためである¹⁾。実際に障害疑似体験やパラスポーツの実践教育が、障害の理解、促進に寄与することは先行研究^{3, 4, 10, 12, 15)}によって明らかにされている。しかしながら、障害者のスポーツをサポートすることは、単に自身が「する」ことで得られた経験をもとにスポーツ実践指導を行うだけではなく、スポーツ活動以外での各種障害による身体や運動機能など障害をはじめ医療に関する知識および理解をもとにした取り組みも求められる。

そこで本研究は、体育や運動について学ぶ大学生と、医療、看護について学ぶ専門学生に対してパラスポーツや障害者に対する印象に関するアンケート調査の結果からパラスポーツに関わる人材育成について検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象およびアンケート調査について

対象は、O県A大学体育学部体育学科に所属で障害者スポーツ論を受講者（以下；体育系学生）96名およびO県B医療福祉専門学校看護学科に所属で障害者スポーツと医療を受講し、本研究に同意を得た専門学生（以下；医療系学生）84名の計180名とした。

アンケート調査は、Google Formsを使用した。アンケート調査の回答では、メールアドレスの未収集、無記名式とし個人の特定が出来ないように設定をした。また、Google Formsの説明欄に本調査の趣旨、成績には一切関係がないこと、実施対象の自由意思による回答について明記し、アンケート調査実施前に再度口頭で読み上げ説明を行った。その後、本調査に対し同意をするものは同意チェック欄にチェックを入れるように伝え調査を行った。アンケート調査の同意欄

にチェック、回答をもって同意を得たものと判断した。なお、本研究の同意にチェックが無いもの、調査項目に全ての回答がないものなど明らかに不適切と判断したものは除外した。

調査項目は、先行研究¹⁰⁾で用いられたアンケート項目を参考とし独自に追加項目を加えたアンケート・フォームを使用した。調査項目は、年齢、性別、パラスポーツの認知および関わりの有無、時期について、パラスポーツに対する印象に関する質問7問、障害者に対する印象に関する質問5問とした。なお、パラスポーツに対する印象および障害者に対する印象の質問内容は、結果において掲示した。

本調査は、体育系学生は2024年4月中旬、医療系学生は2024年9月中旬の第1回目の講義開始前に実施した。

2.2 分析方法

パラスポーツの認知および関わりの有無については2件法を用いた。パラスポーツや障害者に対する質問内容は、否定的なイメージについて確認をする項目が多いため、各種質問に対し「強く思う」、「すこし思う」、「どちらともいえない」、「あまり思わない」、「全く思わない」の5段階尺度を用い、選択肢の「強く思う」を「2点」、「すこし思う」を「1点」、「どちらともいえない」を「0点」、「あまり思わない」を「-1点」、「全く思わない」を「-2点」として数値化し平均値を求め比較検討した。質問項目における両群の比較は、エクセル統計（BellCurve社製）を用い、対応のないStudent-tテストを行った。有意水準は、5%未満（ $p<0.05$ ）とした。

3. 結果

アンケート調査の有効回答率は、180名中164名（91.1%）であった。各群における回答内訳は、体育系学生96名中85名（男性62名、女性23名、平均年齢 20.5 ± 0.6 歳）、医療系学生84名中79名（男性9名、女性70名、平均年齢 20.6 ± 5.8 歳）であった。

3.1 パラスポーツの認知、関わりの有無について

パラスポーツについて知っている割合は、体育系学生85名中81名（95.3%）、医療系学生79名中77名（97.5%）であった（図1）。その中で実際に関わったことがある割合は、体育系学生85名中26名（30.6%）、医療系学生79名中10名（12.7%）であり両群間で有意

な差を認めた ($p<0.01$) (図2)。また、パラスポーツの関わりを持った時期は体育系学生では大学生時、医療系学生では高校生時が多かった (表1)。

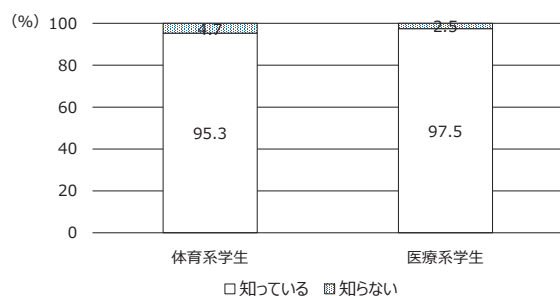


図1. パラスポーツを知っていますか

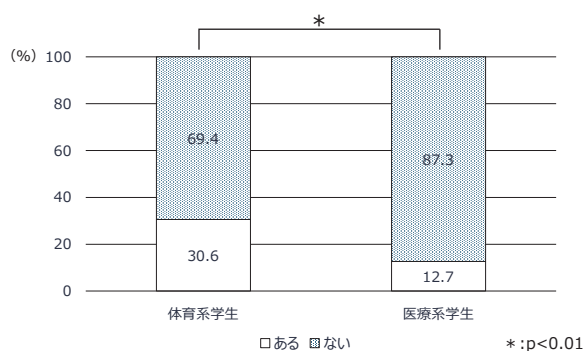


図2. パラスポーツに関わったことはありますか

表1. パラスポーツに関わった時期

	小学生 (人)	中学生 (人)	高校生 (人)	(現所属の 専門学生 大学生 (人)	社会人 (人)	合計
体育系学生 (n=26)	5	5	7	9	0	26
医療系学生 (n=10)	2	2	3	2	1	10

3.2 パラスポーツに対する印象について

パラスポーツに対する印象について、「興味がない」「つまらない」「格好悪い」「障害者だけ実施するスポーツである」「競技実施にて動きが無く、スポーツとして魅力がない」「実施していると運動能力が下がる気がする」は、体育系学生および医療系学生ともに否定的な結果を示したが両群間で有意な差は認めなかった。「リハビリテーションの一環として実施するもの」は、体育系学生および医療系学生ともに肯定的な結果を示し、体育系学生に対し医療系学生が有意に大きかった ($p<0.01$) (図3)。

3.3 障害者に対する印象について

障害者に対する印象について、「一人では何も出来ない」「スポーツの実施は危険である」「一緒にスポーツを実施することは困難」は、体育系学生および医療系学生ともに否定的な結果を示したが両群間で有意な差は認めなかった。「生活するのが難しい」「困ってい

るときは助けてあげたい」は、体育系学生および医療系学生ともに肯定的な結果を示し、体育系学生に対し医療系学生が有意に大きかった ($p<0.01$) (図4)。

4. 考察

結果より、パラスポーツの認識は両群ともに95%以上と非常に高い割合を示したが、実際に関わった経験の割合は低かった。この結果は、東京パラリンピック前後のパラスポーツに関する意識調査における先行研究^{3, 4, 6-8)}でも同様の結果であり、パラスポーツの認知は高まっているものの、パラスポーツと関わる機会の創出やそれをコーディネートする人材育成など、普及におけるソフト面の課題が示唆された。その中で、関わりの有無では体育系学生に比べ医療系学生は有意に低かった。元嶋ら⁵⁾によると、地域スポーツイベントのボランティアは、クラブ・サークル、体育系部活動等の所属先へ依頼を受けることがあると報告されている。今回対象とした体育系学生が所属する大学の約7割の学生は、体育会部活動に所属しており、中学生や高校生でも競技を実施していたことが考えられる。したがって、中学生から現在に至るまで地域スポーツイベントに参加した際に障害者やパラスポーツに接する機会があり、関わった経験の有無で有意な差を生じたと考えられた。

パラスポーツおよび障害者に対する印象では、体育系学生および医療系学生ともに各質問に対する否定的および肯定的な回答傾向は同じであったが、パラスポーツに対する印象での「リハビリテーションの一環として実施するもの」や、障害者に対する印象での「生活するのが難しい」、「困っているときは助けてあげたい」など医療および支援に対する意識は、体育系学生に比べ医療系学生は有意に大きかった。障害者スポーツに対する所属先の違いによる学生の意識について大山ら⁹⁾は、リハビリテーション系学生と人文系学生を比較し、リハビリテーション系学生の方が障害者スポーツの身体的効果に対する認識が高いことを確認し、その原因として専攻とする学びの特性を示唆している。また、角南ら¹³⁾は、人文系、幼児教育系、体育系学科の女子学生を対象に障害者スポーツに関する意識について専攻学科および運動経験の關係に注目して検討した結果、他の専攻学科に比べ体育系学生は障害による日常生活の困惑感が低値を示し、幼児教育系では高値を示したと報告しており、その背景として専攻する学科では体育系学科よりも障害や障害者支援

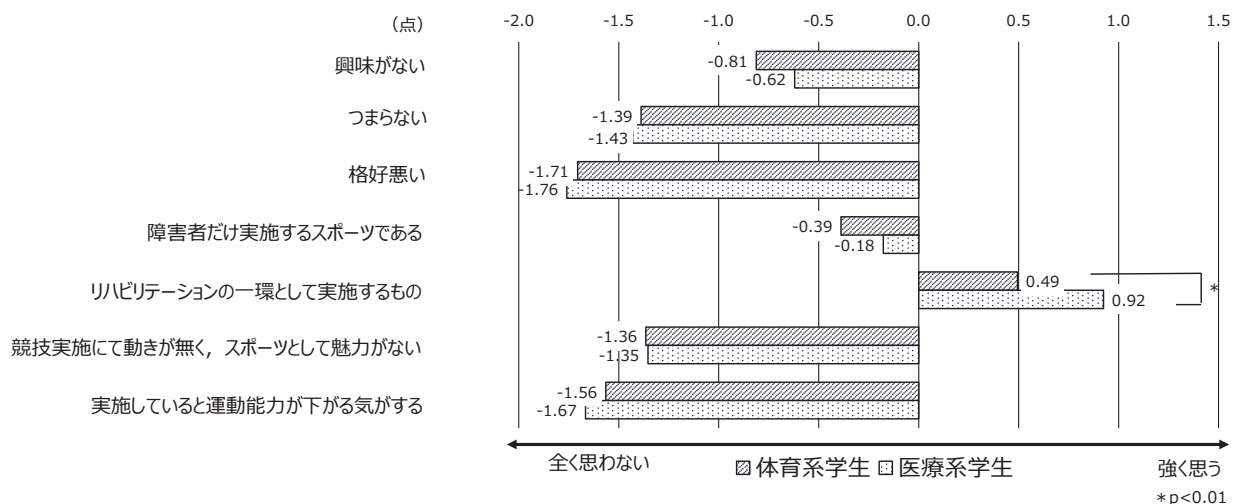


図3. パラスポーツに対する印象

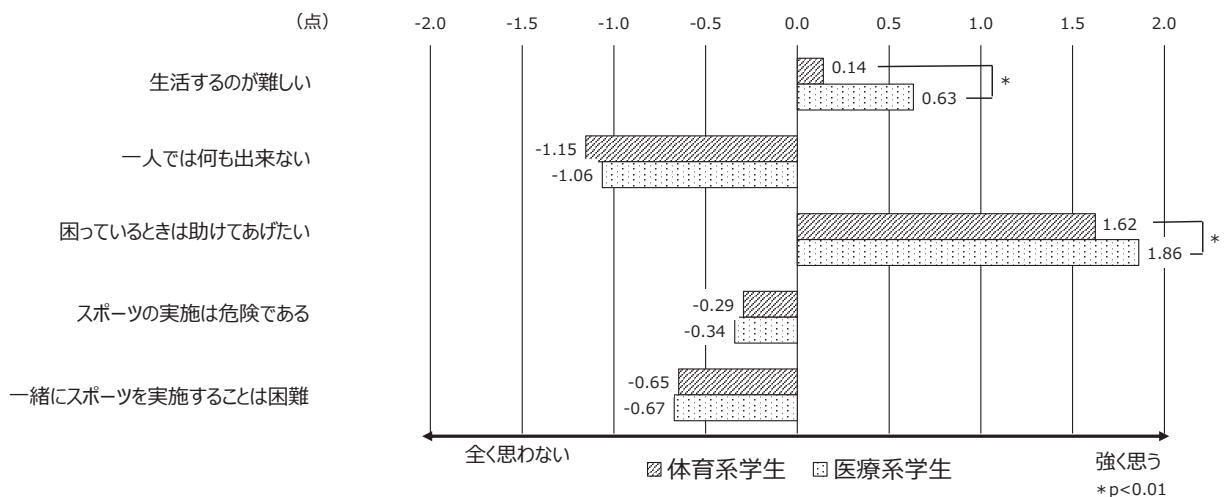


図4. 障害者に対する印象

に対する多くの専門的知識を習得しており、他の学科学生よりも障害や障害者に対して真摯に捉え、慎重に対応する必要があると考えたためと報告している。したがって、日頃より障害や障害者、医療について学んでいる医療系学生の方が、教育特性により医療および支援に対する意識が有意に大きかったと考えられた。

5. まとめ

本研究の結果、単に障害者に対しスポーツ実践指導を行うだけではなく、スポーツ活動以外での各種障害による身体や運動機能など医療に関する知識および理解が求められるパラスポーツに関わる人材を育成するためには、教育課程中に体育系学生であれば医療や健康、障害者教育を、医療系学生であればパラスポーツを含む地域スポーツイベントへの参加を促すプログラムなどを積極的に導入する必要がある。

6. 今後の課題

本研究は、体育や運動について学ぶ体育系学生と医療看護領域について学ぶ医療系学生との間におけるパラスポーツ、障害者に対する印象についてのアンケート調査結果から、今後パラスポーツに関わる人材育成について検討を行った。今回の対象では、体育系学生の79%が男子学生、医療系学生の88%は女子学生と両群間の性別の割合はほぼ対比状態であった。先行研究では、性差によってスポーツボランティアに取り組む意識に違いがあることも報告²⁾されている。今回、結果に揭示をしていないが、性別で比較をしたところ障害者に対する印象での「困っているときは助けてあげたい」で男性（1.62点）女性（1.83点）ともに肯定的回答にあったが、男性に比べ女性が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。この結果より、今後教育カリキュラムに障害者スポーツがある教育機関で同様の調査を行い、性

別における特性について検討していく。そして、さらなる精緻な解釈を行うために質問内容を精査し、因子分析等の解析を試みる必要がある。

尚、本論文では法令に準拠し一般的に障害および障害者を指す場合は障害、障害者と記載した。

参考文献

- 1) 橋口泰一, 大嶽真人, 菊原伸郎, 伊佐野龍司, 内田若希: パラスポーツにおける人的環境整備と育成の連携に関する探索的研究—大学生ボランティアの面接調査から—, バイオメディカル・ファジィ・システム学会大会講演論文集, 35, 1-4, 2022.
- 2) 清宮孝文, 依田充代, 門屋貴久, 阿部征大: 体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化: スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴に着目して, 日本体育大学紀要, 50, 1019-1029, 2021.
- 3) 小玉京士朗, 早田剛, 清水健太, 降屋丞, 桂秀樹, 古山喜一, 河合洋二郎: ブラインドサッカーによる学生の意識変化に関する研究, 環太平洋大学研究紀要, 12, 113-118, 2018.
- 4) 小玉京士朗: 障がい者スポーツによる学生の意識変化に関する研究, 環太平洋大学研究紀要, 13, 55-59, 2018.
- 5) 元嶋菜美香, 宮良俊行, 熊谷賢哉, 金相勳, 田井健太郎: スポーツボランティア活動が体育会系部活動所属学生の気分状態に与える心理的影響—ボランティアスタッフの満足感に着目して—, 長崎国際大学論叢, 16, 13-22, 2016.
- 6) 中村真博: パラスポーツが共生意識に及ぼす影響に関する一考察(1)—パラスポーツ体験に着目して—, 日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要, 14, 63-94, 2020.
- 7) 中村真博: パラスポーツへの意識に影響を及ぼす要因に関する研究, 日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要, 16, 17-32, 2021.
- 8) 中村真博: パラスポーツが共生意識に及ぼす影響に関する一考察(2)—2019年と2022年の調査結果の比較を通して—, 日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要, 18, 135-154, 2022.
- 9) 大山敬子, 金壽子: 障害者スポーツに対する大学生の意識調査, 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, 5, 17-25, 2000.
- 10) 大山祐太: 大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果, 北海道教育大学紀要, 67(2), 267-276, 2017.
- 11) 笹川スポーツ財団: 2021年度調査報告 障害者専用・優先スポーツ施設に関する研究.
- 12) 角南良幸, 鍵村昌範, 下園博信: 大学体育における障害者スポーツ体験が大学生の障害者スポーツに対する意識に及ぼす影響について, 体育・スポーツ教育研究, 15(1), 25-32, 2013.
- 13) 角南良幸, 鍵村昌範, 下園博信: 障害者スポーツに対する女子学生の意識に及ぼす影響: 専攻学科および運動経験の関係について, 福岡女学院大学紀要, 15, 49-55, 2014.
- 14) スポーツ庁: 第3期スポーツ基本計画(令和4年3月25日策定) https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm (閲覧日: 令和6年10月27日)
- 15) 角田憲治, 大石由起子, 永瀬開, 藤田久美: 大学生における障害者スポーツの学習が肢体不自由者のイメージおよび障害者スポーツのイメージに与える影響—体験型授業と講義型授業の比較—, 山口県立大学学術情報, 11, 51-58, 2018.